

日重『和語雑抄』にみる和歌・連歌

中尾 堯

〔要約〕

近世初頭の連歌師に石井了派があり、その孫は法華（日蓮）宗の僧となって日重と称し、当代の宗門を代表する学匠である。日重の代表的な著作の『見聞愚案記』とともに、『和語雑抄』は歌論書として早くから知られ、深草元政は『草山集』のなかで「倭歌を嗜む者、これを写して枕中の秘と為す」と述べている。

『和語雑抄』は、身延山久遠寺の「身延文庫」に収蔵され、これまで幾度も刊行を意図された痕跡がある。しかしながらあまりにも乱丁が激しく、かつはなはだしい虫損によって実現しなかった。このたび全体を整理の上、釈文を刊行する（『身延山資料叢書』九）にあたって、本書の概観を踏まえた新知見を紹介し、近世初頭にあらわれた歌人僧としての日重の姿を描き上げようとする。

『和語雑抄』の内容は、和歌・連歌・歌論等の古典の抄出を主軸とし、日重の評論と体験を随所に書き加えたものである。特に老境にある無常観が仏教思想と相俟って、抄出する古典の選択に反映している。法華宗の僧であるから、数少ない宗祖と遠慮がちに記した自詠の歌に、法華信仰の心情をかいまみることができる。

日重の家系については、従来必ずしも明確ではなかったが、連歌師の石井了派の孫で、父は天文法華乱の折に本国寺で討ち死にしたことが分かった。また、母方も連歌師の出で、連歌を家職とした環境のなかに出生したことが明確となった。また、幼少のころから堺・奈良方面で仏教の基礎を学ぶとともに、和歌・連歌の世界に入り、とくに里村紹巴とは一生を通じて深く交わっている。さらに、連歌を通じて、織田信長・明智光秀をはじめとする畿内の戦国武将とも、つながりを広くしていたものとみられる。

日重は、住持した京都本満寺に庵室を構えて晩年を過ごし、室内には豊かな蔵書を備えていた。その目録をみると、和歌・連歌の古典の基本的な典籍はほとんど揃っていて、当時に名だたる宗教・文化人の文化的営為の姿がしのばれる。

ここで注目されるのは、日重が著した『見聞愚案記』などの漢文の仏教書に、古典の和歌を数多く引用して、文意の理解と雰囲気を整えていることである。もとより漢文の仏教書を、和歌を取り入れることによって、日本の精神的風土になじませようと試みたものと理解できる。中世と近世の交に現れた、優れた学問僧であるとともに、歌学の素養を具えた文人僧日重について、その片鱗を描いてみた。

はじめに

身延山久遠寺の「身延文庫」に、近世初頭に身延山久遠寺の第二十世住持の日重（一五四九―一六三三）が著した、『和語雑抄』が伝来している。和文で筆記されたこの書を紹介するとともに、法華宗の僧としての日重が受け止めた、和歌・連歌を中心とする古典文学の受容について考察する。

日重は京都本満寺の住持で、京都における法華宗の学匠として令名を馳せ、後に身延山久遠寺に招聘され、法華教学をめぐる多くの書を遺している。なかでも晩年に著した『見聞愚案記』^{（注1）}には、漢文による仏教書の抄出の合間に古典の和歌・連歌等を引用し、難解な文脈を理解するための一助と位置付けている。いわば、仮名文で表記される「和語」によって、漢文の仏書を日本の精神的風土に同化させようとする営みが垣間見える。この『見聞愚案記』とほぼ同時進行の形で、慶長二十年（一六二五）から元和四年（一六二八）の四年間をかけて著したのが、身延山久遠寺の身延文庫に伝来する『和語雑抄』の十九冊^{（注2）}で、和歌連歌の古典と歌論集の抄出が大部を占め、自らの見解を書き加える内容である。

日重と『和語雑抄』

近世初頭の日蓮宗における教学の巨匠として日重の名はとみに高く、身延山の中興の祖として弟子の日乾・日遠とともに「重乾遠三師」^{（注3）}と崇敬されている。日重は、『和語雑抄』にみずから「花洛本満寺十二世 身延山久遠寺二十世」^{（注4）}と記しているように、京都本山本満寺と身延山久遠寺の住持に歴任している。しかし、実際にはみずから身延山久遠寺には赴かず、弟子の日乾・日遠を住持として推挙している。

身延文庫に伝来する日重にかかわる書物には、自著の『重談抄』『扶助妙義

抄』をはじめとする教学書とともに、手沢本として「外典」の範疇に属する『礼記正義』『日本書紀』『源氏物語』があり、自著の『和語雑抄』などを加え、日重によって身延山久遠寺にもたらされたとみられる。^{（注5）}これらの内『和語雑抄』は国書として早くから知られていたが、全体的に乱丁が激しくて整理もままならず、内容が紹介されることはなかった。

このたび身延山久遠寺法主内野日総猊下から文化財研究調査委員長に任じられたのを機に、難解な『和語雑抄』の翻刻を試みる機会を得た。本文とその解説は別に紹介するので、ここでは宗教家より別の一面、和歌・連歌等を主体とする「和語」の古典文学の世界に分け入った日重の営みを、『和語雑抄』のなから描き上げてみよう。

現在、身延文庫に収められている『和語雑抄』は、料紙を四つ折りにして綴じた縦一七・二纏に横二四・七纏ほどの横長の帖で、一部に紙背文書を残している。天保九年（一八三八）正月二十五日付の「雑記 入箱記」によると、本来は十九冊からなっていたがすでに第十二と十三帖が失われ、しかも「余むしはミ散々成り居候」と虫損と綴じの破損によって乱丁になっていた^{（注6）}ので、改めて十四束にまとめて新調の桐箱に収めている。このように『和語雑抄』は近世後期からすでに相当荒廃していたが、日重の著書としての存在については当時からかなり注目されていたようである。同時代の日蓮宗の僧で文人として知られた深草元政は、『草山集』「本満寺日重伝」のなかで、「倭歌を嗜む者、之を写して、枕中の秘と為す」と称賛している^{（注7）}。その後昭和にいたるまで、幾度も整序と翻刻が意図された痕跡があるものの、その企てに成功することはなかったようである。

この度の整理にあたっては、内題の脇に執筆開始の日付が筆記されている帖を選んで、改めて年代順に揃えて編集し、注目すべき記事の帖を僅かながらこれに加えた。これらの帖もほとんどが零本で、原本の形を全体的に整え終わることは不可能な状態にあり、端本がかなり未整理のまま残っている。

しかし、全体的に不揃いとはいふものの、『和語雑抄』の内容はほぼ見当がつく状態である。本来は各帖ごとに年代順の帖の番号が付けられていたが、全体が揃う見通しが全く立たないので、これは無視して改めて編集しなおした。

老境の感懐

日重は、五十五歳になった慶長二年（二五九七）に、本満寺に庵室を構えて退隠した。慶長七年（二六〇二）に身延山久遠寺の住持に懇請されたがこれを固辞して、弟子の日乾、次いで日遠を推して自分は赴かなかつた。（注七）

庵室にあつては、今まで自らが習得した日蓮教学を中心に仏教学の知識をまとめ、今まで親しんできた和歌と連歌をはじめとする古典文学の世界に没入し、とにかく書き留めることに専念した。慶長二十年（二六二五）の春に六十七歳の老年を迎えて、教学書の『見聞愚案記』と日本古典文学の『和語雑抄』の著述を同時進行の形で始めたのは、庵室での長年にわたるこのような営みが土台となっていたはずである。生涯の総まとめともいべきでこの両書の執筆をはじめるにあたって、日重は『和語雑抄』の冒頭にその意図と感懐をしみじみと述懐している。最初の帖にあたる慶長二十年二月二十四日には、次のように述懐していて、その心の一端がうかがえる。

老後、ことに病中ゆく方もなくて、つれづれなるまま日を暮しかね、昔見し事心に浮かぶ次第、六十七歳の老眼を拭きて、そこはかとなく書付けり、我さへかた腹いたし、

この一冊を五日間で書き上げると、すぐさま次の巻を書き始める、矢継ぎ早の筆の走りである。慶長二十年二月二十九日に執筆を始めた次の帖の冒頭には、一冊を書き終わった反省をこめて、自省めいた一文をかかげる。

不堪といひ老耄といひ病中といひ、昔見し事聞きし事、そこはかとなく

書付る故に、歌の手尔葉、歌作者、集の名なんとちがひたる事おほかるべしと、ことに思ひ出るままに筆にまかせて書付る間、四季の内にも次第なんど愚定あるべからず、智□れかしと書置斗□、謎立やうなる事さへ、理路のすみたるは知恵を磨きたるに成るといふ也。

この第二冊も、一月余りの間には完成して、慶長二十年四月十一日には第三冊目に入り、冒頭にはこの書を見る者への用心を述べている。

老耄殊病中つれづれなるまま思ひ出る事、筆にまかせ書付、萬不_レ可有_二実理_一、小僧等自然見るとも用心すべし。

巻頭に記されたこれらの述懐をみると、還暦の年をはるかに超えて、いよいよ古稀の年に近いわが身に老いの病を得たことが、「まとめ」ともいふべき著作を発意する契機となつたとみられる。しかし、その病は、病臥する程の重い病ではないらしく、三冊目の執筆を始めた七日目には『見聞愚案記』巻一を書き始めて、十五日後の翌月の三日には完結し、「蒙殊病中不_レ可有_二正理_一」と内題の下に書き入れている。矢継ぎ早の帖の完成から見ると驚く程の速筆であり、しかも記述は正確で誤字や訂正の跡も稀で、『和語雑抄』『見聞愚案記』ともに正確な記述が続いている。病中とはいへ不堪でも老耄でもなかつたが、視力が落ちて「老眼を拭いて」筆を走らせるとき、誤謬の恐れは深く感じられたに違いない。長い庵居の間の営みを書きまとめ上げて、「萬不_レ可有_二実理_一」と云い、実利はないかもしれないが後進の弟子たちに読ませようと、老いの情熱をかき立てて著した両書である。（注八）

日重の執筆に臨んでのこのような感懐は、『和語雑抄』の記述を通じて、和歌・連歌を抄出しその心を叙述する底流をなしている。「老少不定」「諸行無常」の世を想い、成仏得道を期す心が執筆を急がせた。『見聞愚案記』の末尾には、「妙題を唱え、この功力に乗じて自他共に必ず寂光に到らんと願する」ことこそ、「最初心の用心」と結論づけていて、その心意は『和語雑抄』においても同じである。

日蓮の和歌

日重は、仏教学に対する該博な知識を備え、日蓮遺文に精通した学匠であった。したがってその和歌への深い関心が、日蓮が詠んだと伝える詠歌に向かうのは当然のことで、「蓮祖の御詠」と伝える次の五首をあげている。

心とハよこしまにふる雨ハあらじ風こそ夜の窓ハうつらめ

うつぶさにさのみは人のねられねば月をみのぶにをき帰る哉

立わたる身の浮雲も晴ぬべしたへぬ御法の鷺の山風

あしの葉のすがたは舟に似たれども難波の人をゑこそわたさね

此寺をたれきよすみと名付けん濁りてとける五字の法もん

一首目は、「悪鬼入其身」の一句を題に、人の心を詠んだ歌である。暗夜の窓を音高く打つのは強い風だろう。横向きに降る雨などはないように、人の心はもとより邪ではないのだという性善説の心を詠む。二首目は、富士川縁の内房から身延に帰る時の歌で、月を身延の空に置いて、それを頼りに夜道を帰る心を詠む。月だけが頼りの帰り道である。三首目は、身を覆っている心の雲はすつきりと晴れることはあるまい、身延山には靈山浄土の『法華経』の風が吹いているのに。四首目は、「若心小乗化(教)」の一句を題に、小乗教に譬える葦の細い葉は、舟の形に似てはいるものの、悩める衆生を悟りの彼岸に渡すことは到底できない。五首目は、日蓮が「南無妙法蓮華経」の題目を初めて唱えた清澄山で詠んだ歌で、題目で世の濁りを解いて清らかにするこの寺を、清澄山とさながらに名付けたのは一体誰であろうか。大略このような意である。^(注9)

日重は、この五首を連歌師の紹巴に語ったところ、いずれも面白い歌といつて感心され、特に一首目の「心とは…」の歌は「感情あり」と高く評価されたという。また、日重の祖父にあたる連歌師了派は、この五首を「末の集」に入れたと語ったが、それも幼年の頃であったから、集の書名などを詳しく

聞いておかなかつたと後悔している。^(注10) 日蓮が詠んだ和歌と伝えるこの五首には、日蓮の生涯ゆかりの甲州身延山の墓所と、題目を初めて唱えた安房の清澄山を『法華経』の聖地と仰ぐ、清新な信仰の心情を読み取ることができる。これと同時に、『和語雑抄』にこの五首を書き留めた日重の、宗祖日蓮の聖地に寄せる敬慕の観念がここによく表出しているといえよう。

日重の詠歌

日重は、事に触れて古歌を思い出すことには長けていたものの、みずから詠んだ和歌や連歌を公表することにはあまり積極的ではなかつた。元和二年(二六二)大雪節の日に、冬雨の降る日のつれづれのままに書を読み、過ぎ去つたころの人を思いながらみずから慰めて、一首を詠んだ。

いかにしてなぐさびむとも文どもをよまで過ぎゆく人にとはばや

この自作の和歌をしたためたうえで、「わが歌かたる片腹いたきためしに書せり、まして書付るいと物くるおし」と自嘲気味にしたためている。古典の和歌に造詣が深く、連歌の家に生まれて優れた連歌師に囲まれた日重にとつて、自作の和歌や連歌を臆面もなく世にさらすことを憚つたのであろうか。

『和語雑抄』に収めた日重の和歌・連歌には、老年の身にいだく深い無常観と哀惜の情が深く表われている。日重が六十歳を迎えようとする慶長十五年(二六二)の十二月、「暮るとも身にハつもらぬ年もかな」の一句を「歳暮の歌」として詠んでいる。これは、古歌の「数ふれハ我か身につもる年月を送りむかふとなにいそぐらん」を本歌取りしたものである。年が明けていよいよ六十歳の春を迎え、その所感を二首に詠んだ。

徒にあけぬ暮ぬと送りきて六十の春にあひにける哉

ながらへては縦い六十を送るとも半はすぎぬあぢきな身や

次いで翌年の慶長十六年正月には、近衛殿において俳諧の会が催され、日

重は「目はかすみ耳したがはぬ今年哉」の発句に、「六十而耳順の心ばえ也」と解説をつけている。いよいよ六十歳で耳順の年になり昔の勢いはなく、残った半生はいったいどう過ごせるのだろうか。漠然とした不安が心をよぎる連歌である。

『和語雑抄』を執筆している老病の今、もし病が急に重くなって臨終を迎えると、病苦に取り紛れて思うことを果たしえなかったことを憂え、「かねての辞世おかしけれ共」と二首を詠んで弟子たちに託した。

眺こし浮世の花ハちりぬとも驚の高根にあり明の月

法花経の教をきくにたのもしな処は寂光身は仏なり

一首目の「驚の高根」は、『法華経』が説かれた靈鷲山のこと、現身のこの体はなくなっても、来世には釈尊が『法華経』を説法される靈鷲山の浄土にきつという信じての歌である。二首目は、法華経の教を聴くのは頼もしいものよ、死後には常寂光土に赴き、仏の身となるのだからという意味である。ともに法華経信仰による、来世の成仏への期待と確信を詠みこんだ歌である。

秋になって日重は便宜を得て、身延山の住持となった日遠のもとに、「入を見よ出るをし見ん空の月」の発句を送った。すると日遠のもとから「山中者被_レ招寄」を賦した百句があつて、懐紙を送り届けてきたが、その執筆者が堯順だと聞いて懐かしく感じたという。石井家の出で甥にあたる日遠が、身延山で連歌会を催した事実が、この記事によつて窺える。

やがて六十七歳も末になった日重は、病中に間もなく迎える古稀の歳を思い、寂しさのあまり感懐を一首に詠んでいる。

七十におよべる年の暮なればなにつけても物ぞ悲しき 日重

また、京都市法華宗本山の妙蹟寺住持日紹（一五四一—一六三三）は、三年來腰がたたなかつたが、この頃ようやく立つことができたので、これを祝して「たちてこよ遠き木陰の郭公」の一句を贈った。住持の日紹はとても満足したと

いう。

ある年の四月下旬に、「烏丸重相、正親町黄門等、各誘引申し東山靈山へ花見に」行ったことがある。この時の一首では、咲く時期が過ぎてしまったのに、まだ散らずに残っている桜を詠んだ。

心ありて君がためにと散り残る花をばよきよ春の山風

老年の一年一年は目まぐるしく過ぎ去つて行く。元和二年（一六二六）の歳暮の発句と和歌は、そのせわしき姿を詠んでいる。

一とせはめぐりもあへぬ時雨哉

暮るるとも身にはつもらぬ年もかな

数ふれば我が身につもる年月を送り迎ふとなにいそぐらん
いよいよ年が明けると、とてもさわやかな元日の空がひろがった。

かぎりいづ思ひの外のけふの春

元和四年には、日重もいよいよ七十歳、古稀の歳を迎えた。

世にふるも稀なる歳の初哉

この発句に、烏丸大納言光広は二句を詠み、「またき雪間…」を選んで付けた。

またき雪間のわかなつむ袖

あひにあひぬ稀なる年の

日重は、もう一首を挙げています。

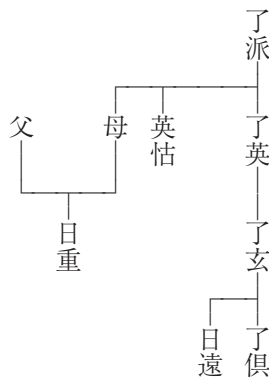
七十になりてもなどか物ごとく矩をこへぬるわが身なるらん

庵室に老年を過ごす日重は、病中の日々を送る自らの姿を觀照しながら、和歌・連歌を詠み続けた。その机上には、執筆中の『見聞愚案記』^{〔註〕}の草稿があり、『和語雑抄』の記事と重複する部分もみられる。

日重の家と交友

日重は、石井了派を祖とする連歌師の家に生まれ、『和語雑抄』にはみずから「祖父了派」と記している。^(注12)母方の叔父には連歌師の石井英怙（一六〇七）^(注13)があり、生まれながらに和歌・連歌の環境に包まれていた。石井家の家系については『石井三家系図』^(注14)があり、これに私見を加えると、次のように大まかな継承関係がわかる。

〔石井家の系図〕



派祖了派の子に了英があり、了玄・了俱と次第する家系である。了英は天文五年（一五三六）の「天文法華の乱」に遭遇して法華一揆に参加し、比叡山をはじめとする諸宗の連合軍と戦った闘士で、攻撃された本国寺を守っていたが七月二十七日に討死した。このように石井家は当時の京都の町で繁栄した法華宗の信者で、討死した了英の跡を了玄が継いだ。ところがその了玄が天正四年（一五七六）に中風にかかって没したので、さらにその跡を了俱が継承している。

連歌師石井家の系譜のなかで、日重は了玄と同じ世代であるが、生まれたのは了英の没後の天文十八年（一五四九）であるから、二人は兄弟ではなく従兄弟の関係にある。また、了玄の第二子は日重の弟子となって日遠と称し、後に日重の委嘱をうけて身延山久遠寺の住持となり、宗門の学匠として異彩を放った僧である。

これらの考察によってわかることは、日重とその弟子日遠は、了派を祖とする連歌師の一族に生まれた深い血縁関係にあった。了派は法華宗の熱心な信者で、子息の了英は法華一揆に参加して天文法華の乱に本国寺を守って戦死した。日重と日遠が相次いで出家して日蓮宗の僧となり、日重が生涯にわたり和歌・連歌の道を忘れなかったのは、このような家の系譜によるものである。日重の仏教界における位置は、みずから「花洛本満寺十二世 身延山久遠寺二十世」^(注15)と記したように、遂には宗門におけるトップの座に位置した。その一方で、和歌・連歌の家柄をもとに、京都をはじめとする畿内の文化人との交流も深く、幅広い文化活動の姿が窺える。

京都を舞台とする寛永文化の一翼を担った文人の公家に烏丸光広（一五七九～一六八三）があり、幼時に日重のもとに師事し、これが学問や諸芸に目を開く契機になったと伝える。後年には日重らの月次の連歌会に加わっていたように、日重の「暮るとも夢のまならぬ年もかな」に、「見し春秋の花の冬枯れ」とつけている。また、日重の庵の花盛りに、日重の「法の師の心の花も色そへて」に、光広は「春にひらく庭桜哉」とつけて、日重と光広の子弟関係を詠み表わしている。

日重と連歌師との交流は、紹巴との間にみられるように、連歌の会を場として広がりを見せた。伊藤伸江氏は『心敬連歌―訳注と研究―』^(注16)において、「法華宗寺院には、住持たちを中心都市、貴顕や武士らが歌会、連歌会につどう文芸サロンが寺ごとに発達し、本能寺もその一翼を担っていた」と指摘する。法華宗の寺院や巷間の談義所では、大勢の信者を集めて法華談義が行われ、信仰面に限らず文化面で大きな影響を与えている。特に本満寺は近衛家と深い関係にあったから公家の参詣が顕著で、法会・法談の終了後には住持坊で一献を傾けることもあった。^(注17)

堺と奈良

日重は連歌師の家系に生まれたとはいえ、幼にして出家して日蓮宗の僧となった上は、仏教学の習得に励むことが常道であった。中世末期の法華（日蓮）宗では、堺の油屋常言の外護によって、妙国寺の日珧を中心に「三光無始会」が開かれて、その動向は宗内の泉南学派として注目されていた。日重が、堺に赴いてこの会に参加したことはよく知られ、修学の合間に和歌を学んでいたようで、『和語雑抄』には次の記事がある。

堺二本覚院等珍トテ紹巴ノ連歌ノ弟子アリシガ、此集ヲ講釈セリ、三大部聴聞ノ疎ニ聴聞セシ也、五十年已前ノ事也、今病中ニ徒然ナルマ、聴聞セシ事共九牛之一毛程也、片腹痛物クルオシキ事也、

三光無始会の講会は堺の頂源寺で永禄十一年（二五六八）にはじまり、『法華文句』『法華玄義』『魔訶止観』の「天台三大部」を講説して、元亀四年（二五七三）に終わった。日重がこの講席に臨んだのは、「五十年已前ノ事也」と述懐しているから、永禄十一年に開講された当初からのことで、二十歳の時であった。

堺に滞在した日重は、「天台三大部」の講義を聴聞のかたわら、紹巴の連歌の弟子本覚院等珍から、和歌の講釈を聴いた。この記事の前には、「古今ハ悉皆覚者」「連歌ノ新式ノ追加モ牡丹花（肖柏）ノ追加ナリ」「定家ノ拾遺愚草ノ抄」などの記述があるので、等珍の講釈はほぼこのような内容であった。また、等珍の講釈はかなり充実していて、日重は老年で病の中ではあるものの、聴聞したその内容のわずか九牛の一毛を覚えてるに過ぎないと嘆いているほどである。奥田勲氏は、当時の堺における連歌の盛況について、「堺伝授という古今伝授の一流をもたらし、堺の富商の経済力を背景にし」た連歌師肖柏ゆかりの文学活動が盛んであったと述べる。^(注18) 紹巴とその一門にとって、堺に講釈の場を設けることは容易ではなかったはずである。日重が、肖柏が主

導する堺の連歌を「堺衆ノ歌ノ下手ナルハ拾遺愚草ヲ覚タル故」と、紹巴の批判の言葉を記した上で、「面白」と評している。このことは、豪商の富を背景にして連歌師同士が競合し、互いに批判しあっていた当時の状況の一端を窺わせる。^(注19)

この後、日重は唯識と俱舎を学ぶために南都奈良に赴き、学問の為に滞在中の日は、在原業平の祥月命日にあたるので、業平の影像が開帳され、これを見るために終焉の地と伝える不退寺を訪ねた。この業平の絹本着色の画像には、勅筆で讚が揮毫されていることで有名である。ただ、法華（日蓮）宗の僧が他宗の寺に赴くことは、他宗の供養を受けることの如何を厳しく追及する、「不受不施」の問題が厳しく問われていたから、当時の宗門の状況下では躊躇せざるを得ない。そのため、他宗の寺院である不退寺に「参詣」ではなくて、「見物にゆきたりし」とわざわざ述べている。

日重は、在原業平の歌には親しみをいだき、『和語雑抄』において特にその伝記と歌などに触れ、『万葉集』『伊勢物語』の記事を中心にして出自や作歌等についても考察を進めている。

二十代の日重についてみると、堺の三光無始会を聴講し、南都奈良に赴いて宗派を超えた仏教学を学び、その傍ら堺では紹巴の門弟から和歌の講釈を聴き、奈良では不退寺など和歌にゆかりのある旧跡を訪ねた。日重にみる法華信仰と文学の営みは、日蓮の遺文を精読して得た深い知見を、広く仏教思想のなかで意味づけ、仏教信仰の情感を和歌に求めようとするものであった。その一生にわたる信仰の方向付けが定まったのは、堺と奈良における若年の時期における幅広い修学によるものである。紹巴とその連歌一門との密接な交わりもまた、堺と奈良での滞在に端緒があったとみてよからう。

日重と紹巴

日重が連歌師紹巴の一門に加わったのは二十代の前半とみられ、その後も和歌・連歌の關係を持ちつづけ、僧侶としての活動のかたわらみずからも創作を試みた。そのうえ、紹巴と石井家とは、連歌を超えて密接な往来があったようである。

天正四年（一五七六）十月二日に、日重の従兄弟にあたる石井了玄が中風で急逝すると、紹巴亭で弔連歌を興行し、紹巴は「わきておこる風を恨みの落葉哉」の一句を詠んでいる。これについて、日重は「あたる風中風也、風にあたる、風にあてらるゝ也、為_レ毒所_レ中の中とおなじ、命_レ八十_二月_二日也」と解説している。

日重の老母が没したのは、天正十二年（一五八四）八月二十一日で、^{（注20）}追善の読経の為に京都大原の奥にあたる芹生に百日籠居していた。この時、紹巴はわざわざ弔いの為に庵室を訪れて、一兩日逗留していろいろと物語をして歌を詠んだ。

溪ふかき菊のながれの山のへや妙なる法の行衛也けん

紹巴は、この歌の結句を「行衛なるらん」としていたのを、「大事はながれ妙なるにうったうし」といって「なりけん」と自ら直した。また、前書きに「本満寺の住寺」と書かれたので、日重が「住持也」と紹巴にいうと、すぐそのように書き直された。

帰京の時に二の瀬まで見送った時、急に雨が降って来た。その翌日届いた紹巴からの札状には、時雨を詠んだ一首が添えられていた。

深山路を送りて帰る衣手の露けさ思ふさよ時雨哉

紹巴の折角の来訪であったのに、発句を所望しなくて残念であったと、日重は悔やんだ。

父了派（祖父カ）の年忌に連歌を興行したのは、叔父の英怙である。本来

なら子の了英が催すはずであるが、若くして法難に殉じ、孫の了玄も天正四年に中風で既に没していたからであろう。了派の弔い連歌を、日重にとつて叔父にあたる英怙が興行したのは、了玄が没した後のことで、おそらく了派の三十三回忌に相当する天正十九年（一五九二）であったかもしれない。この時に紹巴は一句を詠んだ。

つみてしれさそ瞿麦の身の昔

「わが身を抓つて人のいたさをするといふごとく、我が子をもちて親の恩のふかき事をしる者也、わが身のさぞ親のなてられつらん也」と、日重は一句の意を述べている。

日重と紹巴との交わりは親密で、和歌の解釈について意見を交わしたこともあった。ある時、大徳寺一休が詠んだ次の歌をめぐって、二人の間に解釈の違いが生まれた。

名にめでて一休会下にあつまれど一つもやまぬ我慢情識 一休

紹巴はこの歌について、「一休と云名にめでて、諸人が会下にこぞれども、そのあつまるものどもは我慢情識をはなれぬと云心也」と、集会した人々に對する批判を詠んだものであると説明した。これに對して日重は、「一休と云名にめでて会下に集まれ共、一休と云名は実なくして我慢情識は一つも不_レ離ぞと、我が身の事を云る歟」と、一休の自省の一首であると、異なる意見を出した。紹巴はその場では納得しなかったが、後で尤もと改めて慨嘆したという。このことについての日重の感想は、「予か巴と歌の義理を諍事は、日子にあふて目くらへ、親に對して年をあらそひなれとも、さりとてハ義理ハ公家物なれハ如_レ此也」と、歌の能力は全く段違いではあるが私情と公とは別の事だと云う。日重は、和歌連歌の巨匠として、紹巴を深く尊敬していた様子がくみ取れる。

日重と紹巴とは、これらの出来事が物語るように、単に和歌・連歌の子弟とは異なつて、自由な感覚のもとに育まれた交感の世界にあつたといえる。

元政は、『草山集』において「聞人（細川）幽斎及び紹巴が輩、方外の交を為す」と、その深い交友を称えている。

日重の蔵書に見る和歌と連歌

連歌師了派の孫として生まれた日重は、和歌や連歌への親しみは生来のもので、祖父から日蓮の和歌についての話を聞いたこともあったが、十歳のころに他界しているから本格的な指導を受けたわけではない。とはいえ、その影響は深く、生涯にわたって和歌・連歌への関心を失うことはなかった。『見聞愚案記』には、漢文で叙述される仏教教義の合間に、古典の歌集からしばしば和歌を抄出して、インド・中国の仏教的感覚と、日本の風土と感性との調和を図っている。『見聞愚案記』巻第七には、日本の言語は和字をもつて表わし、和歌をもつて日本の風俗とすると説き、仏教を学ぶ柱として和字を習うことが第一の相承として、次のように述べている。

日本ノ言語ハ和語也、和字也、イロハ是也、（中略）日本ニイロハの四十七字ニ一切ノ言語ヲ取也、古近万葉ノ多キ言モ人ノ言フ言ハモ此ノイロハノ字ヲ不レ出也、去レハ和歌ト言テ此国ノ風俗トスル此ノ義也、本尊ニ和字ヲ習事相承ノ随一也、

この一節を敷衍すれば、中国の漢字漢文で表現される仏教を、日本の精神的風土の中に受容し同化させるには、「イロハ」四十七字の和字を習い、和歌に習熟することが最も大事なことであり、ひいては仏教を広める道であるという。『和語雑抄』と『見聞愚案記』の著作は、このような営みの総決算ともいうべきである。

日重は、一生にわたって連歌師紹巴をはじめとする和歌と連歌の巨匠と交わり、深く古典の世界に分け入って親しみ、ゆかりの故地を訪ね歩いた。このような営みについて順を追って叙述する資料は持たないが、『和語雑抄』

の「第二章 菟玖波集と新撰菟玖波集」に解説付きで収めた書名一覧をみると、和歌と連歌にとどまらず、史書・随筆など古典の世界が広がる。『万葉集』と『古今集』をはじめとする「廿一代集」が古典和歌や、『源氏物語』、『枕草子』、『宇津保物語』、『竹取物語』、『伊勢物語』、『栄華物語』、『今昔物語』など、物語文学の基本図書が揃っている。注目されるのは、顕昭の『袖中抄』藤原定家の『秀歌之躰大略』、『秀歌之躰大略』、一条兼良の『歌林良材集』、『連珠合璧集』など、歌論書を意欲的に収集していることで、和歌・連歌の創作よりもむしろ古典の学問への志向を窺わせる。

これらの書物の中には、『徒然草』のように重複して架蔵されているものもみられ、『拾埃抄』の写本には、天文二十一年（二五五二）に紹巴が多くの写本をもつて交合したという三条西公条の奥書があり、定家の書で「無外題」のものもある。したがって、ここにあげた書物はすべて日重の蔵書で、仏書とともに庵室に収められていたものとみて間違いない。これらの豊かな蔵書を背景に、日重の和歌と連歌を主軸とした古典に対する関心は、仏教の教学、特に日蓮教学に対する該博な洞察とあい俟って、京都の知識人としてまことに深い見識を持っていた。

おわりに

近世初頭における日蓮宗の学匠として知られる日重は、連歌師で法華宗信者の石井了派の孫に生まれ、法華宗本山の本国寺で出家した。堺の三光無始会などで法華経と日蓮の教学を学び、京都本満寺の住持をつとめ、身延山久遠寺に招聘されて、一宗を領導した。その傍ら、和歌・連歌の古典文学の世界に分け入るとともに、連歌師の家柄をもとに紹巴をはじめ当代の文人と広く交わり、特に歌学に精通した。古稀を迎えた七十歳の前後に、『和語雑抄』と教学書の『見聞愚案記』を同時進行の形で執筆した。

『和語雑抄』は、和歌・連歌等の古典の抄出が基本であるが、随所に日重の「聞き書き」や私見を書き加えている。これらの叙述の奥には、老境に至ったみづからを顧みる無常観が流れていて、戦国争乱の前代にみられる京都の法華一揆とは異なる、法華信仰の受け止め方が窺える。『見聞愚案記』の記述も、法華（日蓮）宗をはじめとする仏教の諸項目を解説した内容で、同様な観念が基盤となつて叙述されている。

ここでもうひとつ注目されるのは、漢文で表現される仏教思想と信仰の境地を、和歌・連歌によつて日本人の感性に浸透させようと、和歌・連歌をはじめ古典文学の書から故事を積極的に引用していることである。それは、庶民の日常生活のなかに仏教信仰が浸透して日常化していく、近世にみる庶民仏教の潮流の発端を示すものである。

【注】

- (1) 『日重上人集』第一・二巻 本満寺日重上人集刊行会 昭和五四年
- (2) 『和語雑抄』桐箱入函記（注5参照）には、十九冊のうち二冊が失われていると記されている。
- (3) 『和語雑抄』の「歌詞同心異抄」（本書第九章歌詞同心異抄一一三頁参照）には、「元和四戊午五月日 花洛本満寺十二世・身延山久遠寺二十世日重行年七十^①」とある。
- (4) 『身延山久遠寺史料調査報告書』「典籍」解説 中尾真樹 身延町教育委員会
- (5) 『和語雑抄』桐箱入函記に次の一文があり、すでに乱丁の情況にあつた天保期の姿が窺える。

此和語抄十九冊之内、十二ノ巻・十九ノ巻（故纏十四束）右ノ式冊不見、後日尋可^レ入、

余々むしはミ散々成り居候故、桐にて箱をさし入置候、時々虫払の為拜見可^レ致書也、

天保九正月廿五日

百人一首 □ □ 聖院日考（花押）

(6) 川口智康編『深草元政草山集を読む』中興三師伝（一）本満寺日重の項 勉誠出版

(7) 『身延山史』「重乾遠三師」の項、ならびに注（6）参照。

(8) この述懐の文にみる「老眼を拭き」「老耄といひ病中といひ」の表現は、身延山久遠寺十一世の日朝（一四二二—一五〇〇）の著書の奥書にしばしば記される語句で、例えば『補世集』六の奥書には、次のような感懐を述べている。

明応六年丁巳八月七日生年七十六才 日朝（花押）

去七月中旬、俄発病、不慮得^レ減氣（中略）日朝自身不^レ顧^レ老耄、遂写功、（中略）拭^レ老眼、注^レ之、奉^レ扇^レ冥覽^レ者也。

『身延文庫典籍目録 上』所収

(9) これら五首は、日蓮の真蹟遺文にはみえない。

(10) 「祖父了派、蓮祖の御歌、末の集に入れたり」と物語ありし、一向幼年の時なれハとふておき遺恨千萬也。

(11) 『見聞愚案記』は元和五年に成稿している。

(12) 石井了派は宗祇の門人で連歌を家職とし、三条西実隆から古今伝授をうけている。

(13) 日重の母は天正十二年（一五八四）八月二十一日没で、母方の叔父英祐は慶長十二年（一六〇七）十二月十四日没（影山堯雄編『新編日蓮宗年表』の「日遠所持過去帳」による）

(14) 『石井三家系図』京都大学図書館蔵 本書については、中島謙昌「『石井三家系図』の成立―連歌師石井家と東九条荘下司式石井氏―」がある。京都大学国文学論叢 二〇〇四

(15) 註（3）を参照

(16) 伊藤伸江著『心敬連歌―訳注と研究―』四四五頁 笠間書院

(17) 中尾堯「近衛政家の日蓮宗信仰」豊田武博士古稀記念論文集『日本中世の政治と文化』所収。後に中尾堯『日蓮信仰の系譜と儀礼』（平成十一年）に収録。

(18) 奥田勲『連歌史―中世日本をつないだ歌と人びと―』一九〇頁 勉誠出版

(19) 紹巴については、奥田勲『連歌史―中世日本をつないだ歌と人びと―』の「紹巴―ある連歌師の典型―」二二五頁を参照。

(20) 影山堯雄編『新編日蓮宗年表』の「日遠所持過去帳」による。

(21) 注(6)を参照

(22) 身延文庫に伝来する、室町時代書写の『源氏物語』五十四帖は、もと日重所持本とみられる。(『身延山久遠寺史料調査報告書』「典籍」解説 中尾真樹解説 身延町教育委員会)

(23) 『拾埃抄』にある三条西公条の奥書(本書12ページ参照)

此一冊、小僧紹巴、以_レ数多之本_ニ考_カ勘_カ之_一、而_レ舛謬猶有_レ之、先_ニ哲言_ニ校_カ校_カ書如_レ塵埃風葉、随_レ掃隨_レ有_レ云々、可_レ俟_ニ後君子_ニ而已、

天文廿一重陽前日記_レ之、

称名野釈 在判

これと同文の三条西公条の奥書は、『仮名文字遣』という書にもみられる。
奥田勲『連歌史―中世日本をつないだ歌と人びと―』一三九頁 勉誠出版